

令和8年度 中部縦貫自動車道と中央自動車道長野線を連結する
松本JCTの建設事業に伴う発掘調査

みなみくりいせき

南栗遺跡現地説明会 資料

令和8(2026)年9月5日(土)

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

1 令和8年度調査の概要

所在地：松本市和田・島立

調査期間：令和8年4月7日～12月25日（予定）

調査面積：5000㎡

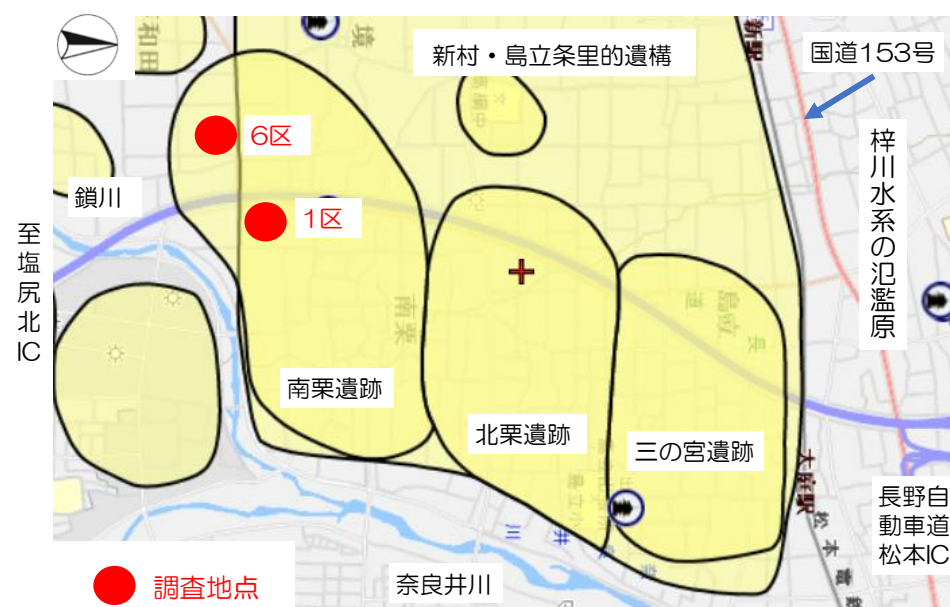
今年度の調査成果：遺構 縦穴建物跡49軒、掘立柱建物跡2軒、土坑約70基、鍛冶炉2基
遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器、韃の羽口、砥石、鉄滓
瓦、銅製鈴、花瓶、穀物を入れた土器

2 いままでの調査成果

南栗遺跡は1983年から1999年に圃場整備に伴い松本市教育委員会が、1985・1986年には長野自動車道建設に伴い当センターが発掘調査を実施しました。2022年からは中部縦貫自動車道に接続する松本JCTの建設に伴う発掘調査を実施し今年度は5年目となります。これまでの調査で古墳時代後期から中世初頭にいたる約500年に渡り人々が生活してきたことが明らかとなりました。

昨年までに調査した縦穴建物跡の総軒数は640軒を超えています。今年度も新たに約50軒の縦穴建物跡がみつかり、松本盆地最大級の古代集落であることが一層鮮明になってきました。

今年度は調査の中心が長野自動車道西側の和田地籍（6区）に移りましたが、縦穴建物跡は途切れることなく分布していて集落の西端を把握することは次年度以降の課題となりました。



松本市遺跡地図（松本市デジタルマップより引用）

松本電鉄

3 今年度の調査成果

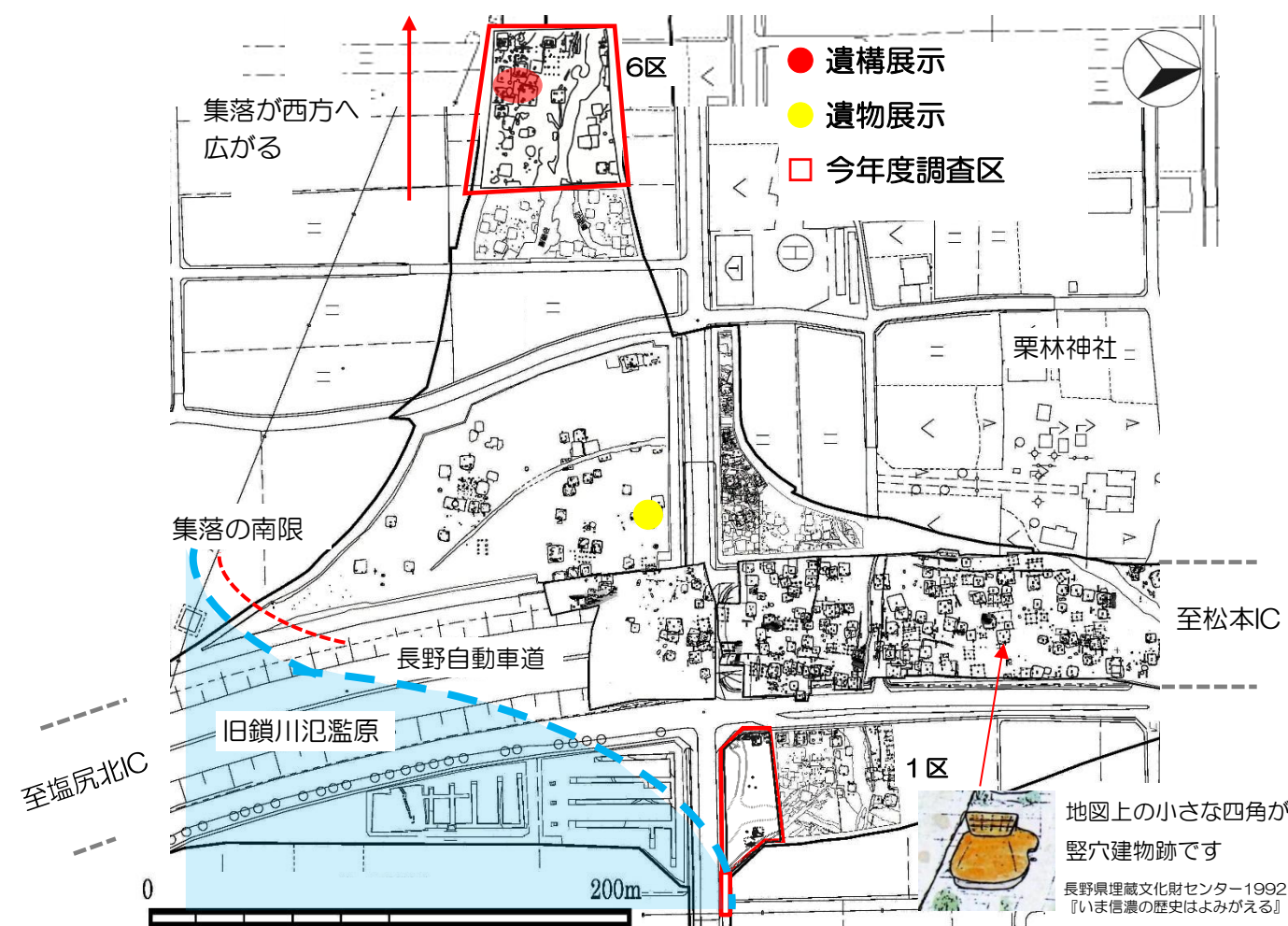
今年度は1区・6区の2か所で調査を行いました。今までの調査成果により、調査区の南東側は縦穴建物跡の軒数が減少することがわかってきました。これは旧鎖川の氾濫原を避けた場所にムを形成したためと思われます。

一方、6区では平安時代前半の大型縦穴建物が造られ、中世初頭の縦穴建物跡が分布するなど、平安時代以降に集落の分布範囲が長野自動車道周辺より西側に移動したことが新たに確認できました。



令和8年度調査区（東から）

今年度調査区



地図上の小さな四角が縦穴建物跡です
長野県埋蔵文化財センター1992『いま信濃の歴史はよみがえる』

長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野市篠ノ布施高田963-4 TEL：026-293-5926
MAIL：maibun@naganobunka.or.jp HP：<https://naganomaibun.or.jp>
担当：廣田/小山
支援業務（株）シン技術コンサル：松田/安生/吉澤

4 和田地籍で平安時代以降の集落を確認

和田地籍（6-2区）では竪穴建物跡を41軒検出しました。集落の時期は大きく平安時代前期（9世紀後半頃：右図●）と平安時代後期～中世初頭（11世紀末～12世紀初頭：右図●）の2時期に分かれます。これまで集落の中心は長野自動車道周辺と推測していましたが、平安時代以降に集落が西側に広がることが判明しました。

特に今年は重要な発見が多くありました。

① 大型建物跡を発見（6039号竪穴建物跡）

1辺が9m程の方形となります。壁に沿って礎石が並び、カマドの脇からは大量の土器が出土するなど通常の建物跡とは規模も質も異なります。

このような建物跡は鎖川の対岸の下神遺跡^{しもかん}ほかで確認されており、9世紀代のほぼ同じ時期に登場します。このころ地域の有力者が周囲の人々をまとめて新しいムラを作り、開発を進めたと考えられています。



礎石を有する大型建物跡

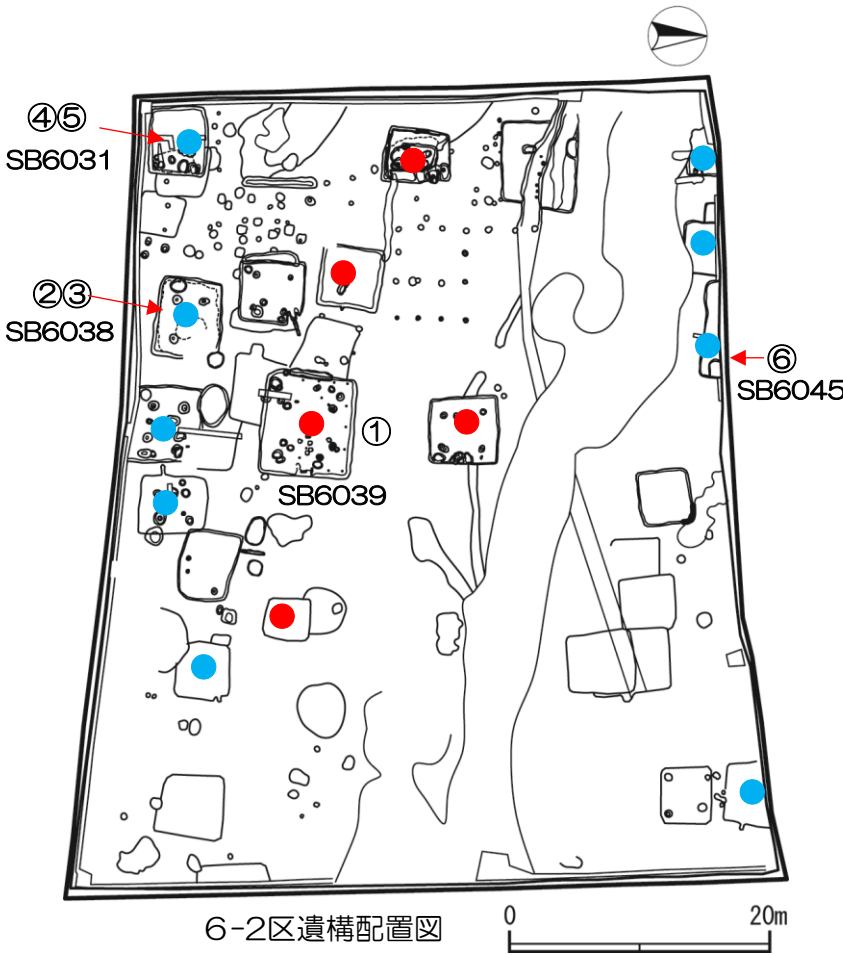
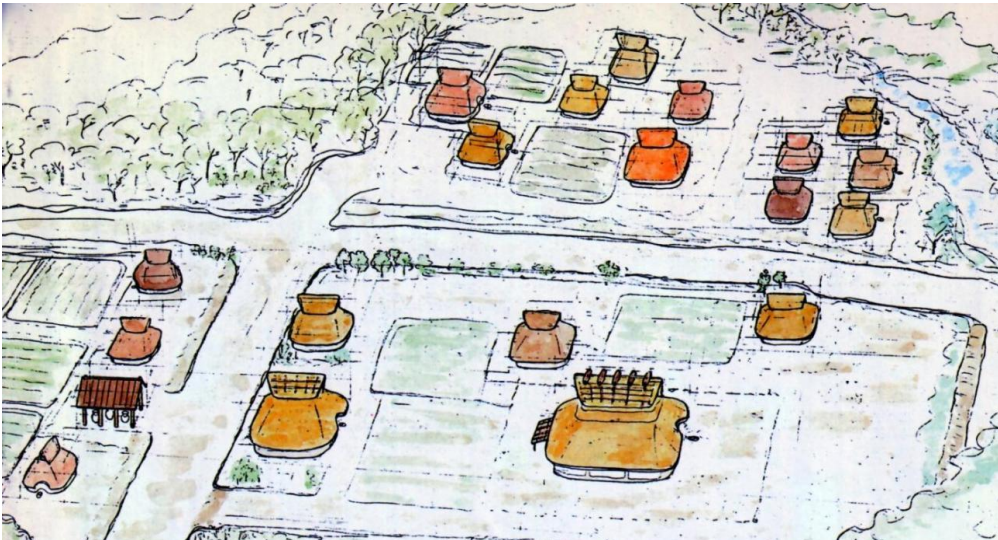


散乱する大量の土器

大きな建物と小さな建物のある集落景観（松本市 北方遺跡）

大型建物の周囲には広い空間が広がるのに対し、一般的な庶民が暮らした建物は1辺が4～5m程と小さく、大型建物から離れた場所に集中して建てられる傾向があります

長野県埋蔵文化財センター1992『いま信濃の歴史はよみがえる』



6-2区遺構配置図

② 銅製鈴（6038号竪穴建物跡）

銅でつくられた鈴です。現在は音が鳴りませんが、内部に錆びの塊が付着しており、内部に鳴子^{なるこ}（丸）であった可能性があります。



幅約3cm

③ 花瓶（6038号竪穴建物跡）

仏具の金属製花瓶を模したと考えられる灰釉陶器です。全体形が漢字の「垂」の字に似ているため「垂字形花瓶^{あしがたけびょう}」と呼ばれますが、本資料は脚部を欠損しています。



高さ約9cm

④ 鞆の羽口（6031号竪穴建物跡）

炉に空気を送り込むための筒です。先端部が高熱で溶けてガラス化^{かし}しています。この集落で鍛冶が行われた証拠の資料です。



長さ約9cm

⑤ 取鍋（6031号竪穴建物跡）

坩堝内で溶解した金属を受け取る容器です。付着物の色調から青銅の溶湯を流した可能性があります。



器の直径約10cm

⑥ 穀物を入れた土器（6045号竪穴建物跡）

破壊されたカマドの中から合わせ口の土器が出土しました（写真左）。蓋になる土器を外すと中から石が出土し、石の下から炭化した穀物が出土しました（写真右）。

古墳時代～古代における竪穴建物の調査ではカマドが壊された状態で発見される例が多く、竪穴建物跡を廃棄する際に火を扱うカマドを壊す何らかの行為があったようです。



器の直径約10cm